

# 『観念法門』に引用された『般舟三昧経』

成 瀬 隆 純

善導の浄土教思想は、一般には『観経疏』の中にすべて述べつくされているといわれる。事実大師自身この疏の終りに  
某今欲出此観経要義楷定古今……一句一字不可加減欲  
写者一如経法。

と記しているごとく、自己の教理に対する自信の程がうかがわれる。しかし、このような、いわば完成された教理からは、僧伝等に記述されている、無数の善男善女から渴仰された生きた善導像を見出すことはなかなか困難であり、大師自身「罪悪生死ノ凡夫」と深く自己反省をされ、また、自分と同じ有縁の凡夫が救済される道を求め続けた善導像は、かえって、各種の往生伝や、いわゆる行儀分の書の中に見出すことができると思われる。

すなわち、行儀分四書の中から、その成立が比較的早いとみなされている『観念法門』を選び、その中の『般舟三昧経』の引用のされ方をみることによつて、形成されつつある善導の浄土教思想をみることにする。

『観念法門』に引用された『般舟三昧経』（成瀬）

この『観念法門』には、これから問題とする『般舟三昧経』を含めて、十四の經典名を出している。それらは、また、師の道綽の『安樂集』にその名がすべて見えていることから、善導は明らかにその影響を受けているということができる。『観念法門』には『般舟三昧経』の引用は、ただの四回にすぎないが、その引用の仕方には重要な意味があると思われる。

般舟三昧経請問品明七日夜入道場念仏三昧法

と出しているところは、実は、現本のいわゆる一卷本般舟三昧経の問事品と行品からの引用であつて、ここにはかなりの分量が引用されている。そして、この場合重要なことは、善導は自分の教理を立証するためにこの經典を用いているのではなくして、凡夫往生の実践の經典としてこれを用いているということである。

もともと、この『般舟三昧経』は東晋の盧山慧遠が自らの宗教実践に用い、以来、天台智顛も『摩訶止観』巻第二に

説く、常行三昧の実践経典として用いており、道綽の『安楽集』、迦才の『浄土論』にもそれぞれ引用されている。しかし、慧遠や智顛の場合は、凡夫往生のためではなく、三昧発得のためであり、また、道綽、迦才の場合は、それぞれの教理を説明するために引用されたのであつて、実践的な用いられ方はしていない。

ただ、この場合注意されることは、善導が、一卷本の『般舟三昧経』を用いたのに対し、道綽・迦才は智顛と同じ三巻本の『般舟三昧経』を用いていることである。しかも、一卷本の行品にのみ見られる「当念我名」という句を受けて、道綽は「常念我名」、迦才は「常当専念我名」という一句をわざわざ附加していることである。

このことから推していえば、『般舟三昧経』の行品に説く内容、とくに一卷本の「当念我名」という一句が当時の浄土教関係の人たちにとつて、注目されていたことがわかる。

善導がこの『観念法門』中に『般舟三昧経』を実践経典として用いるに到つた理由として、先学は天台智顛の『摩訶止観』の影響を指摘している。しかし、善導は智顛と異なり布教対象を自分と同じ罪悪生死の凡夫とみている。

ただの一人で、九十日を一期として常行三昧を行うことは、機根の劣つたもの、あるいは、日々の生活に追われている人々にとつては、極めて困難なことである。その点を考慮

して、善導は数人の修行者が自からの家業の軽重を量つて、一月を四分して、その中の任意の七日間を唯坐唯立して行う修行を勧めている。これは天台のいう常行三昧に比べて、はるかに易行的な修行方法といふことができる。

すなわち、本来「十方諸仏悉在前立三昧」という、高度な三昧の発得を目的として説かれたこの経典を、凡夫相応の往生経典とみなして、自からの浄土教の実践を説くこの『観念法門』に引用したということができると思われる。そして、このことは、この経典を引用するにあつて、経に全部で八箇所ある「菩薩」という語句を、五箇所にわたつて、「衆生」・「学者」・「四衆」と書き改めていることからも推測されることである。

次に、『観念法門』では、

般舟三昧経請問品明七日夜入道場念仏三昧法

という見出しを示してから『般舟三昧経』の引用が始められているのであるが、これに似た見出しの示し方は他にただ一箇所しかない。

すなわち、本書の後半の部分にある

仏説観仏三昧海経密行品第十二巻第十

というところである。

いま、後者について、良忠の『観念法門私記』巻下の注を参照すると、ここに経題が詳しく掲げられていることに関し

て、

何費<sup>三</sup>言論、亦不<sup>レ</sup>似<sup>レ</sup>常。答、上明<sup>三</sup>懺悔滅罪法、今明<sup>三</sup>三昧行儀。所釈<sup>レ</sup>法門其義異故、雖<sup>三</sup>是同經、更<sup>三</sup>舉具題。又未<sup>レ</sup>測<sup>三</sup>知大師深意。

と疑問を投じている。

また、ここで問題となるのは、良忠が「上明<sup>三</sup>懺悔滅罪法、今明<sup>三</sup>三昧行儀」と答えているところである。善導自身が『観念法門』中に、

又以<sup>レ</sup>此經証亦是懺悔至誠方法。応<sup>レ</sup>知一切經内皆有<sup>三</sup>此文、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>広録。今略<sup>三</sup>抄三部經、以示<sup>三</sup>後学、除<sup>三</sup>不至心。

と述べているごとく、いま問題の『観仏三昧海經』の引用部分中にも、本来、懺悔滅罪の法が説かれているべきであるのに、それが説かれていない。そのことを良忠は「今明<sup>三</sup>三昧行儀」と指摘しているのである。

次に、『観念法門』中の「今略<sup>三</sup>抄三部經、以示<sup>三</sup>後学」という点について、同じく良忠の注をみると、

略<sup>三</sup>鈔三部經者。問、上所<sup>レ</sup>引觀仏大集一經。如何結<sup>三</sup>三部耶。答、前<sup>二</sup>經上、加<sup>三</sup>木榭經、總結<sup>三</sup>三部。又於<sup>レ</sup>觀仏經中、引<sup>三</sup>懺悔文<sup>二</sup>以為<sup>三</sup>一部、引<sup>三</sup>密行品、亦為<sup>三</sup>一部、更加<sup>三</sup>大集、合為<sup>三</sup>三部。如<sup>レ</sup>云<sup>三</sup>法華本迹為<sup>三</sup>二經。

と注釈して、やや牽強な解釈をしている。

すなわち、(一)経題が詳しく与えられ過ぎていること。(二)引用された経文の内容に、懺悔滅罪の法を説いていないこと。

『観念法門』に引用された『般舟三昧經』(成瀬)

(三)三部の經の数え方が明確でないこと。以上の三点から考えるに、『観仏三昧海經』の引用の中、「仏説觀仏三昧海經密行品第十二卷第十」から「名<sup>三</sup>觀仏三昧海、亦名<sup>三</sup>念仏三昧門、亦名<sup>三</sup>諸仏妙華莊嚴色身經、汝好受持、慎勿<sup>三</sup>忘失」に至る部分は、現本の『観念法門』に置かれている位置が違っているのではないかという疑問が生じてくるのである。

そこで、先きに述べたごとく、この『観念法門』中で、経題の与えられ方が類似している「般舟三昧經請問品」の引用部分と、「仏説觀仏三昧海經密行品」の部分の経文の引用の仕方の特徴を調べてみると、両者とも、他の引用例に比して、比較的長く経文を引いているということが出来る。また、『般舟三昧經』についてみると、般舟三昧を得たうえで見仏する仏を説明して、遠く離れた三人の女性に夢の中で会う譬喩の部分と、引用部分の最後に若干の省略が行われていることが注意される。さらに、『観仏三昧海經』についてみると、「是名<sup>三</sup>功德藏」という語句と「仏告<sup>三</sup>阿難、此經名<sup>三</sup>繫想不動」の語の間に五つの譬喩を省略し、『般舟三昧經』の場合と同様、引用部分の最後に省略が行われている。その他は殆んど原經典に忠実に経文を引用しているといえる。実は、このことは『観念法門』において重要なことであつて、他の多くの場合は、經典に説く内容の意味をとつて、概略引用しているのみである。それに対して、二經の引用方法に

は、少なからぬ類似性があるということが特徴として指摘される。

ここで、あらためて『観念法門』の本文の最初の部分についてみると、「依<sub>二</sub>観<sub>一</sub>經明<sub>二</sub>觀<sub>一</sub>仏三昧法<sub>二</sub>と標題して、觀<sub>一</sub>仏の方法を述べているが、実は、その内容は本文中に「如<sub>二</sub>觀<sub>一</sub>仏三昧経説<sub>二</sub>と明記されるごとく、おもに『觀<sub>一</sub>仏三昧海経』によつてゐる。善導は『観経疏』の中で「今此観経、即以<sub>二</sub>觀<sub>一</sub>仏三昧<sub>二</sub>為<sub>一</sub>宗、亦以<sub>二</sub>念<sub>一</sub>仏三昧<sub>二</sub>為<sub>一</sub>宗」というように、『観経』をもつて觀<sub>一</sub>仏三昧と念<sub>一</sub>仏三昧の經典として重ることからして、『觀<sub>一</sub>仏三昧海経』を『観経』を補う経として重用してゐるようである。しかも、觀<sub>一</sub>仏三昧をして念<sub>一</sub>仏三昧と同等の重みを与えてゐると見られよう。

なお、天台智顛の『摩訶止観』巻二で常行三昧を説く中に、觀<sub>一</sub>仏について、

三月常念<sub>レ</sub>仏。云何念。念<sub>二</sub>三十二相。從<sub>二</sub>足下千輻輪相、一一逆緣<sub>一</sub>諸相乃至無見頂。亦<sub>レ</sub>從<sub>二</sub>頂相順緣<sub>一</sub>乃至千輻輪、令<sub>レ</sub>我亦速<sub>二</sub>是相<sub>一</sub>。

と述べられてゐるが、その影響から『觀<sub>一</sub>仏三昧海経』に説く、觀<sub>一</sub>仏の方法を本書に略説したと推測し得るのである。つまり、善導がこの『観念法門』を著わすにあつて、まず、觀<sub>一</sub>仏三昧を説く『觀<sub>一</sub>仏三昧海経』の名を出し、次に、念<sub>一</sub>仏三昧を説く『般若三昧経』の経名を掲げたとしても、何ら不自

然ではないであらう。

すなわち、両経からの引用方法の類似性、引用部分の経文の内容、両経を並置したときの文章の構成の落ち着きからいって、「仏説觀<sub>一</sub>仏三昧海経」で始まる引用部分は、そつくり『観念法門』の冒頭部分へ移行することができるのではないかと思われるのである。

もし、この推論にして大過なければ、この『観念法門』一書は、善導が『観経』に説かれた内容を『觀<sub>一</sub>仏三昧海経』・『般若三昧経』を用いて、一切往生人が実践できるよう、天台智顛の常行三昧、半行半坐三昧の説を援用して、觀<sub>一</sub>仏三昧、念<sub>一</sub>仏三昧を主意として撰述されたものであらう。

- 1 浄土宗全書二、七二～七三頁。
- 2 大正四六、一二頁、下。
- 3 浄土宗全書一、二四頁。浄土宗全書六、六五〇頁。
- 4 望月信亨「善導大師の著書より見たる教系」藤原幸章「善導浄土教と天台智顛」
- 5 浄土宗全書四、二二四～二二六頁。
- 6 浄土宗全書四、二七四頁。
- 7 浄土宗全書四、二四〇頁。
- 8 浄土宗全書四、二七五頁。
- 9 浄土宗全書二、三頁。
- 10 大正四六、一二頁、中。